

繊維化コラーゲン・変性コラーゲンマトリックス4×4 cm)を生理食塩水で潤湿させて被覆した。術後1, 2, 3, 4, 5週の組織切片を採取し組織学的検索を行なった。

#### 結果と考察

術後第2週目においては、擬似真皮構造が認められ、人工真皮の組織親和性は高いと考えられる。

一方、表皮形成は第3週目より観察されたが表皮乳頭形成は見られなかった。第5週目には表皮は部分的に過形成の状態になっており、一見表皮乳頭様を呈していた。しかし正常表皮乳頭と比べると形態が異なっていた。ここでは、人工真皮の組織適合と表皮形成を中心に文献的考察を加えて報告する。

### 15. 全上下顎同時移動術を行った高度下顎前突の1症例

(歯科・口腔外科)

○高橋 達夫・野村 真弓・水野 博之・  
名取 正喜・三宮 慶邦・扇内 秀樹

近年顎変形症に対し、咬合機能の改善や審美的改善のために外科的矯正術(骨切り術)が行われているが、中顔面の垂直的・水平的な変化が著しくかつ高度な下顎前突症に対しては、全上下顎同時移動術が適応となる。

今回われわれは上顎劣成長を伴った高度下顎前突症の1例を経験したのでその概要を報告する。

症例は19歳の男性で、顎の変形が気になり咬合と改善の審美的改善を主訴として当科を受診した。上顎骨劣成長、下顎骨過成長でsketal class IIIと診断し、昭和62年8月より術前矯正治療を開始し、3年3カ月後の平成元年11月終了、同年12月12日上下顎骨骨切り術を施行した。手術は口内法により上顎はLe Fort I型骨切り術を、下顎は下顎枝矢状分割法を用いた。すなわち最初に上顎骨の骨切りを行い、下顎歯列を基準とし手術前に作製しておいた中間スプリントを用いて骨片を移動・固定し、次いで下顎の骨切りを行い最終スプリントを用いて固定を行うdouble splint法を応用した。6週間の顎間固定を行い、開口訓練の後、平成2年1月28日最大開口域24mmで軽快退院した。

### 16. エキスパンダー法における皮膚粘弾性計と超音波皮膚診断装置の応用

(形成外科)

○磯野 伸雄・片平 次郎・倉沢 卓見・  
樋口 良平・若松 信吾・野崎 幹弘・  
平山 峻

エキスパンダー法は、皮膚病辺の近くにシリコン製の袋を挿入し、その後徐々に生食水を注入し、健常皮膚を十分に拡張させ、病変部を切除する方法で、わが国でもかなり一般的な手術法となっている。われわれの教室においても、1985年から1989年12月末までに、190例の本法手術を施行している。しかるに、本法を確実にを行うために、いまだ問題が少なくなく、種々のモニター法が考案されている。今回我々は、皮膚の粘弾性および皮膚の厚さに着目し、若干の動物実験を行ったので報告する。

実験方法：高研社製の90mlラウンドタイプのエキスパンダーをラットの背部に挿入し、2週間後にフルエキスパンションした。そのさい、Cortex Technology社製のDERMAFLEX Aを用いてエキスパンダー直上の皮膚の粘弾性的変化すなわち注入前、注入直後、注入後30分、2日後、4日後のelasticity, distensibilityおよびhysteresisの変動を計測した。またエキスパンダー拡張前後および2カ月後の皮膚の厚さを皮膚用超音波診断装置同じくCortex Technology社製DERMASCAN Cを用いて計測した。

結果：粘弾性ではdistensibilityおよびhysteresisにおいて、フルエキスパンション直後に著明に減少が認められ、2日以降には、ほぼ注入前の値に回復した。またエキスパンダー直上の皮膚の厚さは拡張直後は変動はなかったが、2カ月後には著明な減少が認められた。

考案・結論：現段階では、臨床においてエキスパンダーに対する安全かつ簡便に使用可能なモニターはない。皮膚の全方向への伸展性を簡単に計測できる皮膚粘弾性計と、超音波により無侵襲で皮膚の厚さの変動を見ることがのできる皮膚超音波診断装置は、今回の動物実験において皮膚の変化のモニターとして有用であった。臨床への応用も可能と考えられた。

### 17. 未成熟人格を背景に多彩な症状を呈した女性の1例

(神経精神科) ○大和 央・難波 隆之

生活の破綻をきっかけに、不安発作が出現、更にアルコール依存、薬物乱用、摂食障害、繰り返す自傷行為、等の症状が、交互に出現した20歳女性の症例を報告する。

本症例は、中学生の時から非行にはしり、シンナーを吸引、姉の働くスナックでアルバイトをし、毎日ボトル1本程度のウイスキーを飲み、義務教育は途中で放棄、17歳の時に結婚・出産し、妻としてまた母親と